

メディア・リテラシー地域ワークショップの実践 －メディア教師のディディ・シンクレアさんを招いて－

2002年4月27日から5月5日にかけてカナダ・トロントからディディ・シンクレア (Dede Sinclair) さんを日本に招き、各地でメディア・リテラシーを学ぶ機会を作ることが出来た。企画したのはFCT会員を中心とする「ディディ・プロジェクト」のメンバーである。ディディさんは、退職するまで小学校教師として長年メディア・リテラシー教育に携わってきた方で、現在はカナダのAML (メディア・リテラシー協会) の理事である。

ここでは、企画の経緯および豊中、高槻、岡山でのワークショップとそこでの交流を中心として、これらを通して感じたことや学んだことを報告する。

●長年の交流から

ディディさんとFCTの出会い、3年前にさかのぼる。1999年3月に鈴木みどり代表がトロント、オタワでメディア・リテラシーの取り組みを訪問調査した際に、就学前のメディア・リテラシー教育で先駆的な取り組みを進めるポール・カレイロさんを紹介し、彼が勤務する幼稚園へ案内して下さったのが、ディディさんであった(『ガゼット』No.68「メディア・リテラシーの国カナダを訪ねて」)。

2000年5月、トロントで開催された「サミット2000：子ども・若い人たちとメディアーミレニアムを超えて」(『ガゼット』No.71)にはFCT会員、立命館大学の院生たちが参加したが、この時もディディさんは院生4人のホームステイ先を探し、ご自宅にも2人のFCT会員(西村、岡井)がホームステイさせていただいた。さらにサミットの最終日には、院生とそのホストファミリー、サミット参加のFCT会員を自宅に招いて下さった。こうして私たちの交流の輪は広がり、カナダとのつながりがより強いものとなった。

この時ディディさんと出会ったFCT会員を中心にボランティアで立ち上げたのが、「ディディ・プロジェクト」である。プロジェクトでは、せっかく経験豊富なメディア教師であるディディさんを日本に迎えるのだから、彼女からメディア・リテラシーを学ぶ機会を各地で作ろうということになり、いくつかの企画を立てた。この計画を彼女に伝えたところ、喜んでメディア・リテラシーワークショップを実施し、カナダの経験を日本で分かち合いたいという返事が返って来た。

そこで、具体的な日程について細部を固めつつ準備を進め、大学での研究会の企画・運営は、カナダでお世話になった院生が担うことになった。最終的には次のようなスケジュールができあがった。

・4月28日 大阪府豊中市

「対話からはじまる社会への提案ーメディア・リテラシー市民ゼミナール」公開講座でワークショップ(とよなか国際交流協会/FCT共催)

・5月1日 京都市

立命館大学産業社会学部メディア・リテラシー論(担当：鈴木みどり)の授業にゲストスピーカーとして参加。同大学国際言語文化研究所メディア・リテラシー研究会で報告。

・5月2日 大阪府高槻市

高槻市立第4中学校で中学2年生に授業。富田青少年交流センターで子ども向けワークショップと交流会。

・5月3日 岡山市

ワークショップ「メディア社会を生きる子どもとメディア・リテラシー」(メディア・フォーラムおかやま主催)

以下では、豊中、高槻、岡山での取り組みを中心に報告する。

●豊中:集中講座の最終セッションでの公開講座(企画・運営:榎井縁、西村寿子)

財団法人とよなか国際交流協会は、2002年度地球市民教育事業として、昨年度に引き続いて『対話から生まれる社会への提案』～メディア・リテラシー市民ゼミナール』を、4月27～28日の2日間の集中講座として、FCT市民のメディア・フォーラムと共催した(会場:とよなか男女協働参画推進センター)。その2日目の最終セッションを公開講座とし、ディディさんを迎えることになった。

昨年度は、6回連続講座で市民がメディア・リテラシーを体系的に学ぶ場を提供したが、今年は短期間で集中して学ぶことで、より学習効果を高めたいと考えた。

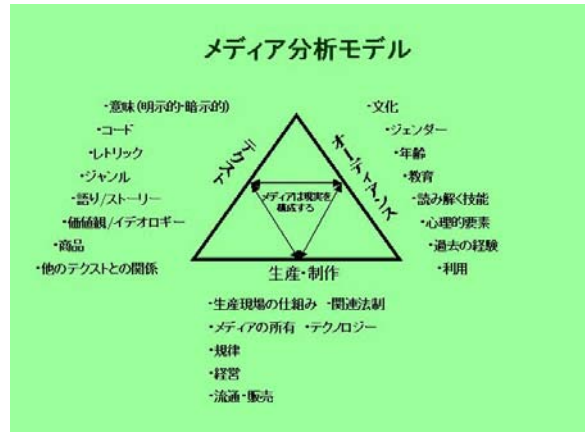
セミナーには、国際交流センターで活動する市民、豊中市職員、大阪府内の教職員、大学院生など30人程が参加し、積極的に討議や分析作業を行った。ディディさんにとっては、来日直後の日本での最初の講座が私たちのセミナーになったので、主催者としては緊張した。FCTから通訳兼でファシリテーターとして参加した高橋恭子さんとは直前まで打ち合わせをする慌しさだった。

「メディア・リテラシー;カナダの取り組みから学ぶ」と題した報告とワークショップには、さらに10人ほどの参加者が加わった。ディディさんは「昨年の9月11日以後、私たちは世界におけるメディア・リテラシーの重要性を認識しています」という言葉から始め、三角形の分析モデルの解説とそれを使ったワークショップを行った。

ディディさんは、トロント教育委員会が1998年に発刊した*"Responding to Media Violence -Starting Points for Classroom Practice"*の共著者の一人だが、その中にこのワークショップと同じものが提案されている。三角形の分析モデルは、『Study Guide メディア・リテラシー入門編』にも掲載されているが、ディディさんのワークショップでは、三角形の分析モデルの「テキスト」「生産・制

作」「オーディエンス」のそれぞれの側面について、質問に答えながら分析作業を行い、分析対象がどのように構成されているかを解釈していく。

＜三角形のメディア分析モデル＞



ディディさんは分析方法について、三角形のメディア分析モデルを示しながら次のように説明された。

例えば、「テキスト」について考えるときは、具体的なモノを分析対象にししながら「これは何ですか」「これと同じようなものを他に3つあげることができますか」「これが誰かを傷つけることはありませんか」、などの質問について考えながら分析していく。

「生産・制作」の側面について考えるときは、「誰が作るのですか」「どのくらいお金がかかるのでしょうか」、というような質問を通して、「オーディエンス」に関しては「どうしてそのテキストが好きなのですか」「あなたのご両親は好きですか」「なぜ好きなのでしょうか」、などの簡単な質問を通して考えるのである。

説明の後、数名のグループに分かれてワークショップを行った。今、子どもたちのあいだで流行しているゲームボーイやシール手帳、少年少女向けの雑誌、などが分析対象として机に載せられた瞬間、参加者のあいだでは戸惑いがあったが、2日間共に対話を進めながら行ってきた分析作業の経験が効果を発揮して、話し合いは次第に活気づいた。「こうした作業を子どもと共に進めることが大切です」と説明された通り、映像の分析だけでなく具体的なモノを対象にした分析は、子どもと共に進めることができ

る活動として、非常に参考になった。

セミナー終了後、近くの居酒屋で懇親会を持ち10数名が残った。旅の疲れも見せずに、積極的に(日本酒をはじめ…) 様々な日本初体験をこなしていくディディさんのパワーに驚かされた。

●高槻：中学2年生対象の授業と子どもワークショップ (企画・運営：岡井寿美代)

5月2日、ディディさんは高槻第四中学校で、野口由紀さん(立命館大学大学院生)の通訳を介しながら、2年生のクラス40人を対象に授業を行った。クラスには多少、緊張した空気が流れていた。まず企画担当者が、ディディさんの紹介やトロントでの出会いを簡単に話して、授業が始まった。

ディディさんは、コンピュータ・ゲームやアニメキャラクターなど、日本で流行っているものの多くが、遠いカナダでも同じく流行っていることや、映像やインターネットを通じて、企業が世界のあちこちの子どもを商品のターゲットにしていることなどを話し、「メディアは全て商売と関係している」というキーコンセプトを説明していく。

「今、よく見るドラマは何?」「アニメは?」の質問に、口々に生徒は答えていく。およそ100分の授業だったが、生徒たちは、「みんなはターゲットにされている。だけど、みんなには選択の自由がある」と言う指摘をとて真剣な表情で聞いていた。

午後4時から、富田青少年交流センターで子ども向けのワークショップを行った。参加者は、小学生とおとなで、ラグや毛布を敷いた会場では、子どもたちが寝転んだり、最初は会場にいたのに「勉強?」と聞いて逃げていく男の子がいたり、とても自由な雰囲気だ。

ディディさんが、カナダの位置を地球儀で探しはじめると、子どもたちは「飛行機でどれくらい?」「わざわざ来たの?」「(ディディさんの)年は?」など口々に質問をはじめ、距離は一気に縮まった。彼女も中学生相手の時よりもリラックスして見えた。

次は、子どもが持ってきていた“ゲームボーイ”を片手にディディさんが、子どもに質問する。「どうして紫色を選んだの?」、「このゲームは男の子しかしないの?」。子どもたちは、今までそんなことを誰からも聞かれたことがなかったので、一生懸命考える。「う〜ん。それって、はやっている色やからかなあ」、「男の子だけじゃない。女の子も遊ぶよ」。すると、ディディさん「それじゃ、“ゲームガール”でもいいんじゃない?」。こういった、やりとりの後、三角形の分析モデルを使ってマンガ雑誌、少女向け雑誌、マクドナルドの包装紙、CDなどを子どもとおとながともに分析する。

子どもとのワークショップの後、おとなだけで交流会を持った。昨年、富田青少年交流センター主催「メディア・リテラシー入門講座(連続6回)」に参加した教師や今回初めて参加した教師や保育士さん、センターのボランティア、市議員などが、授業やワークショップに高い関心を示した。

残念なことに時間があまりなく、参加者は本当になごりおしそうだった。もっと、もっと話したいという雰囲気だった。この湧き出る思いを大切に、富田青少年交流センターは、今秋、何らかの形で学びの場を実現したいと考えている。

●岡山：今後のステップに

(企画・運営：乙竹文子)

豊中、京都、高槻の日程を無事終えて、連休で混み合う5月3日、ディディさんはこの日も通訳を担当してくれた野口さんとともに、新幹線で岡山市へ向かった。

岡山では、メディア・フォーラムおかやまが本年2月、3月に企画・開催した「メディア報道とメディア・リテラシー：パート1、パート2」の盛り上がりを受けて、次のステップにするために「さんかく岡山」に助成金申請をしたり、チラシをつくって宣伝したり、と手分けをして準備を進めた。当日、参加者は、2、3月企画の参加者や岡山県男女共同参画推

進センター主催のメディア・リテラシー集中講座の参加者をはじめ、小・中学校、大学教員、大学院生、公民館職員、地方紙記者など約40名であった。

当初は、小学校の高学年から中学生の子どもが主体のワークショップを企画していたが、子どもを連れて参加する予定の人たちがハプニングで出席できず、子どもは3人（小学生1人と中学生2人）にとどまった。

ディディさんは、子ども主体と考えて組み立てを考えていたが、おとなが多くなったと聞いても柔軟に対応してくださった。

岡山では、2つの活動を行った。最初に、参加者全体で子どもたちが好きなテレビ番組、映画、ゲーム機、ゲームソフト、雑誌などを1位から10位までリストアップし、ホワイトボードに書き出す。書き出したリストを見ながら、それが女の子向きか、男の子向きかを参加者に聞いてリストにチェックマークを入れていく。

ディディさんは、この活動を通してキーコンセプト「メディアはものの考え方（イデオロギー）や価値観を伝えていく」を確認することができる、と指摘した。

つづいて、豊中、高槻でも行った三角形の分析モデルを使って、コミック、少女向け雑誌、マンガ雑誌、ポケモンのキャラクターグッズなどを分析した。参加していた子どもがコミックやキャラクターグッズを提供し、おとなたちにそれらについての情報を教えていく形で行われた。

参加者からは、「学校に馴染みにくくなった子どもと一緒に三角形を使って話し合ったが、子どもがとてもクリティカルで楽しめた。この経験が続けていきたい」「メディア・リテラシーは楽しいと聞いていたが、本当にそうだった」「女性問題だけがメディア・リテラシーではないことがよく分かった」という感想が聞かれた。

●なぜ、三角形の分析モデルなのか

豊中、高槻、岡山のワークショップでは、三角形のメディア分析モデルを使って、流行している様々なモノ（雑誌、マンガ雑誌、ゲームボーイ、カード、コミック、マクドナルドの包装紙、キャラクターグッズなど）を分析した。

各地のワークショップに参加する中で、中学生くらいまでの子どもにとっては、三角形の分析モデルを使って、具体的なモノを分析する手法は、メディア・リテラシーの学びの入り口としてとても有効であることを実際に、確認することができた。

子どもにとっては、好きなおもちゃ、カード、コミック、ゲームを自分と切り離して見つめることは容易ではないと考えられる。しかし、具体的な質問の答えを探しながら、分析モデルを使うことによって、普段自分たちが慣れ親しんでいるマンガやゲーム機などのモノを客観的に捉えることができるようになるようだ。

たとえば、岡山のワークショップの時、中学生の少女は「生産・制作」に関して「誰が作りますか」「どれくらいお金がかかりますか」という質問に、「こんなこと今まで考えたことはなかった」とつぶやいていた。

「なぜ三角形の分析モデルを使うのか」と質問したところ、ディディさんからは2つの理由が示された。一つは、モデルが8つの基本概念をすべてカバーしていること。二つめは、分析モデルが家庭や学校で使いやすいということであった。

例えば、幼稚園や小・中学校の教室にこの三角形のメディア分析モデルを拡大コピーして置いておき、子どもたちが新しいモノを学校に持ってきた時に、短い時間（5分くらい）でいいから、一緒に考え分析してみるといい、と語っていた。

なぜなら、それを繰り返すことで、モノの中に見られる記号や約束事を分析することができるようになり、子どもたちはメディア・リテラシーの基本概念を具体的に学ぶことができるからだ。そして、高校生くらいになって初めて抽象的な思考を理解でき

るようになる。このころから基本概念をスムーズに理解することができるようになる、とも指摘していた。

また、この活動は、おとなと子どもが一緒に行うことができることも魅力である。親や教師はややもすると、子どもが好きなモノをあまり知らないことが多いし、知ろうともしない。この活動を一緒にすることで、おとなは子どもから情報を引き出すことが可能になる。このように話し合うなかで、子どもの文化を批判するのではなく、子どもとのコミュニケーションを一緒に作り出ししていくことができるのである。

ディディさんが指摘するように、三角形のメディア分析モデルは、8つの基本概念をすべてカバーしている。しかも、三角形の分析モデルは、メディアを社会的文脈で深く読む際に不可欠なモデルである。だから、ディディさんが提案する活動は、子どもだけではなく、市民講座の導入にも適しているのではないかと感じた。おとなにとっても具体的な分析対象を手にして考えていく活動は、メディア・リテラシーの入り口として有効なのかもしれない。

●メディア・リテラシーをどう学んだか

ディディさんに同行するなかで、メディア・リテラシーをどのようにして学んだのか、と尋ねてみた。すると、興味深いことが分かった。オンタリオ州ではトロント大学などが教師のステップアップのための数多くのコースを提供しており、その中の一つにメディアを教えるためのコースがある。1コースは週1回3時間、仕事を終えた後に通う。9月から3月までの7ヶ月間約30回の講義に参加する。

ディディさんの場合は、3コースまで学んだ。コースを終えるとメディアを教える専門家として認定されて、給料にも若干反映されるという。

1コースで約90時間、それを3年間で計270時間学んだわけである。当時、そのコースを教えたのは、AMLのバリー・ダンカンさんやニール・ア

ンダーセンさんだったという。授業では論文を読み議論するだけではなく、毎週メディア・ログを提出したり、3コース目には短い論文を書いたり、準備に追われたと語ってくれた。

日本でも今後、小中学校でメディアを教えようとした時に、教師むけにこのような本格的なトレーニングを提供する仕組みが必要なのではないか、と考えさせられた。

●これからの交流の出発点として

岡山でのワークショップを終えて、ディディさんは同行した私たち（西村、岡井）とともに広島へと向かった。この旅の最後に広島平和資料館を訪問するためだ。5月4日、平和公園の原爆ドームから資料館へと向かう。

連休でとても混み合った資料館では、3時間近くかけて、展示や説明を熱心に見たディディさんは、原爆の被害の展示を目のあたりにして「世界中の兵士が広島に来て、これらを見る必要がある」と感想を述べ、今回の日本訪問が広島で終わったことがとてもよかったと語った。

最後に、ディディさんは、FCTの取り組みが市民主体であることにも感銘を受けたこと、メディア・リテラシーの学び方が、日本でも参加と対話を中心とする学びであると知って、驚いたと語っていた。また、AMLとFCTの長年にわたる交流の基盤にたって、今回の企画がなされたことで、何の不安もなく、非常に有意義な日々を過ごすことができたとのコメントをいただいた。

さらに、今後の交流のために帰国したらすぐに日本語の勉強を始めたい、と語り、外国語を覚えるならあまり年をとりすぎない方がいいので、と付け加えた。

今回、各地で多彩な企画をすることが可能になったが、その背景には、FCT活動を通して、メディア・リテラシー活動を自立して担う市民の輪が着実に様々な地域に広がりはじめていることが感じられた。

どの地域も連続講座などの企画に取り組み、その経験を通して関心を持つ多様な人びとが数多く集まるようになっていく。

ディディさんを招いて行ったワークショップは、各地の担い手たちを勇気づけ、今後の展開を確実に活性化させていくことができるということを予感させてくれるものだった。(報告:榎井縁、岡井寿美代、乙竹文子、まとめ:西村寿子)

— 『fctGAZETTE』 No. 77(2002年7月)掲載 —